

# 共通テスト「情報 I」試作問題の校内実施結果報告

## —分析結果と生徒の反応からの展望—

藤岡 健史

京都市立日吉ヶ丘高等学校

t-fujioka@edu.city.kyoto.jp

大学入学共通テスト「情報 I」の試作問題が公開され、昨年 12 月と翌年 2 月に高校 1 年生 40 名に解答してもらった。本稿では、その分析結果と生徒の反応について報告し、今後の「情報 I」が目指すべき方向性について展望する。

### 1. はじめに

2022 年 11 月 9 日に、大学入試センターから「情報 I」の新たな試作問題等[1]が公開され、出題内容がより具体化された。それを受け、12 月には高校 1 年生 40 名に本試行問題（参考問題を除く）を 60 分間で解いてもらい、翌年 2 月には参考問題を解いてもらった。本稿では、その分析結果と生徒の反応について報告し、今後の「情報 I」が目指すべき方向性について展望する。

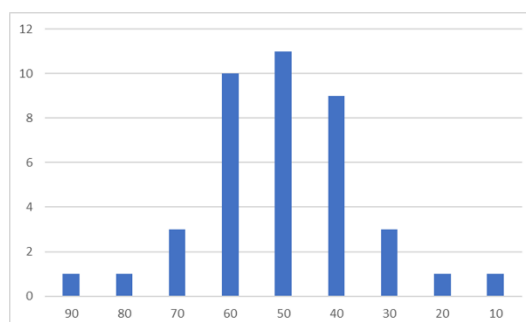


図1 得点分布[人] (「90」は 90 点台を示す)

### 2. 試作問題の校内実施

#### 2.1 実施要領

筆者の勤務校において情報 I を履修中である高校 1 年生 1 クラスを選び、12 月に本試作問題を受験させた。詳細は表 1 の通りである。

表 1 校内実施の詳細

実施日	2022 年 12 月 12 日 (月)
受験人数	40 人 (実施クラスの 100%)
解答時間	60 分 (参考問題を除く)
問題提示方法	印刷した問題冊子を配布
回答方法	CBT (Microsoft Forms)
使用デバイス	生徒の個人持ち端末 (BYOD)

#### 2.2 授業進度

2022 年 12 月時点での実施クラスは、学習指導要領における「(1)情報社会の問題解決」「(2)コミュニケーションと情報デザイン」と「(3)コンピュータとプログラミング」の途中まで学習済であった。プログラミング言語は Python を使用し、教科書のサンプルコードを打ち込みながら理解を深める形式で授業を進めた。「(4)情報通信ネットワークとデータの活用」については 12 月時点で未習であったが、翌年 2 月までに学習を終えた。

#### 2.3 実施結果

得点分布のヒストグラムを図 1 に、大問ごとの得点率を図 2 に示す。なお、全体の平均点は 55.2、標準偏差は 15.2 であった。

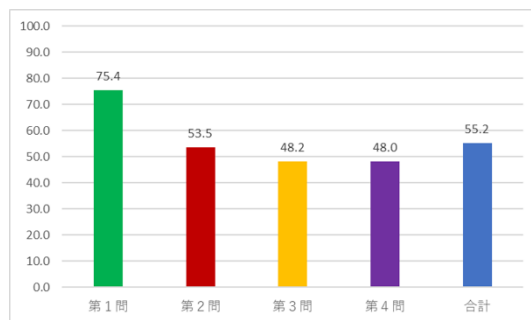


図2 大問ごとの得点率[%]

得点率は、第 1 問が最も高く 75.4%であり、第 4 問が最も低く 48.0%であった。第 3 問と第 4 問はほとんど差が見られなかった。

設問ごとの得点率を図 3～6 に示す。結果は、第 1 問の設問 1[ウ]が最も高く 97.5%であり、第 4 問の設問 5[カキ]が最も低く 12.5%であった。

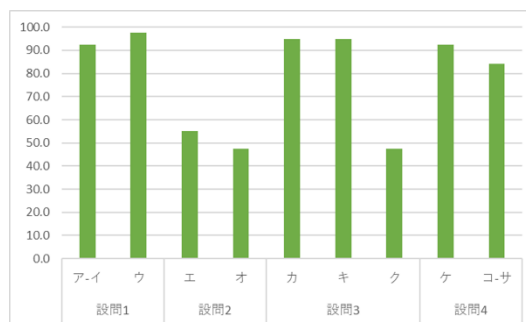


図3 第1問の設問ごとの得点率[%]

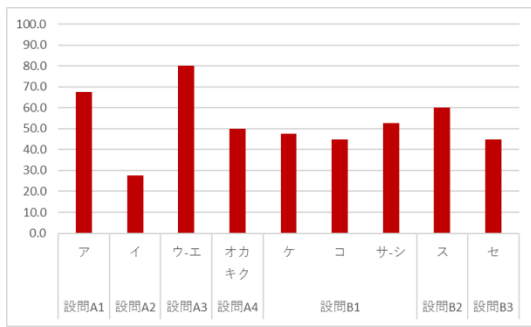


図4 第2問の設問ごとの得点率[%]

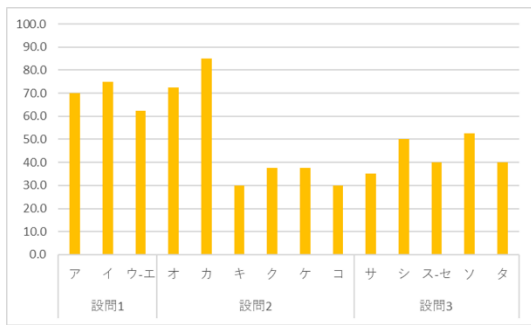


図5 第3問の設問ごとの得点率[%]

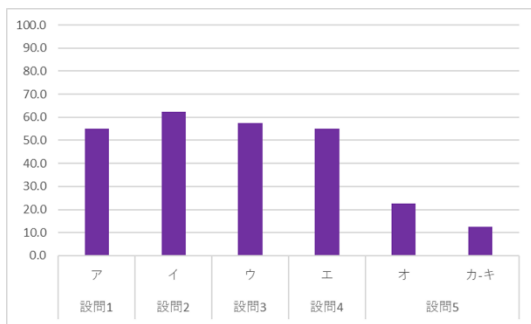


図6 第4問の設問ごとの得点率[%]

また、翌年2月末に学年末考査の一部として、試作問題「情報I」参考問題を出題した。設問ごとの得点率を図7に示す。平均得点率は69.5%であった。

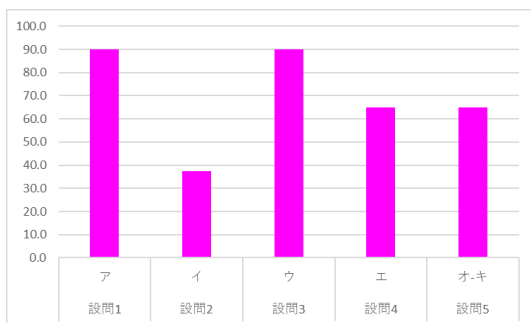


図7 参考問題の設問ごとの得点率[%]

また、大問ごとの箱ひげ図を図8に、他教科の模試(2023年1月実施)と本試行問題(12月実施)の重回帰分析の結果を表2に示す。

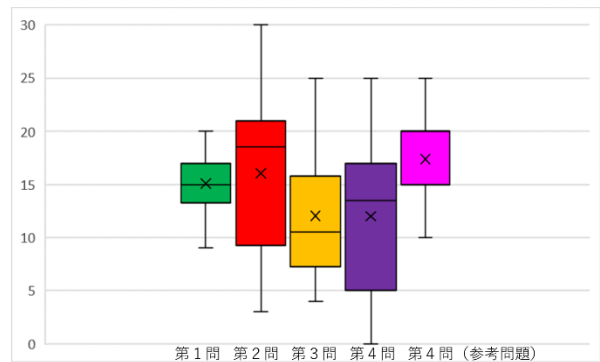


図8 大問ごとの箱ひげ図[点]

表2 他教科との重回帰分析(N=40)

	係数	標準誤差	t	p
切片	14.835	16.297	0.910	0.369
国語	0.296	0.201	1.476	0.149
数学	0.540	0.179	3.022	0.00461 **
英語	-0.200	0.189	-1.061	0.296

### 3. 考察

特別な対策をせずに本試行問題を受験させた結果、得点はベルカーブに近い分布を示した。難易度はおおそ適切であったと評価できる。高得点の問題は主に第1問に集中し、差は広がらなかった。生徒への事後インタビューでは、問題を注意深く読むことで解けたという感想が多く寄せられた。一方、第2問と第4問では得点の差が大きく、第3問では得点率が4割以下の設問が半数を占めた。他教科(国語、数学、英語)との重回帰分析の結果、数学との相関が見られ、演習の必要性が示唆された。さらに、「(4)情報通信ネットワークとデータの活用」の出題範囲において、参考問題は第4問よりも高い正答率と小さな分散を示した。実施校では、探究的なアプローチを重視し、実際のオープンデータを分析して得られた考察結果をスライドにまとめる課題を提供しているため、これにより、体験的な学習による本質的な理解の重要性が確認されたと考えている。

以上の結果から、生徒間には多少の差異が見られたが、実践校では特別な対策なしでも一定の成果を上げられることが分かった。探究的な活動を重視し、本質的な理解を目指す授業の方向性は適切であると考えている。

### 参考文献

- [1] 大学入試センター：令和7年度試験の問題作成の方向性、試作問題等、  
[https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken\\_jouhou/r7ikou/r7mondai.html](https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/r7ikou/r7mondai.html)